2017年3月

日本フィル「被災地に音楽を」

訪問コンサート　レポート　第38号

被災地支援の訪問演奏は、2011年4月から2016年12月末までで通算208回となりました。

訪問地

2016年 12月11日　　岩手県 山田町

山田町中央コミュニティセンター／いっぽいっぽ岩手

12月12日　　岩手県 宮古市

田老地区サポートセンター

12月13日　　宮古恵風支援学校／宮古市総合福祉センター

訪問メンバー

オーボエ　　松岡 裕雅

ヴァイオリン　平井 幸子　　加藤 祐一

ヴィオラ　　中川 裕美子　　チェロ　　横山 桂

発行:(公財)日本フィルハーモニー交響楽団　東京都杉並区梅里1－6－1 TEL 03－5378－6311

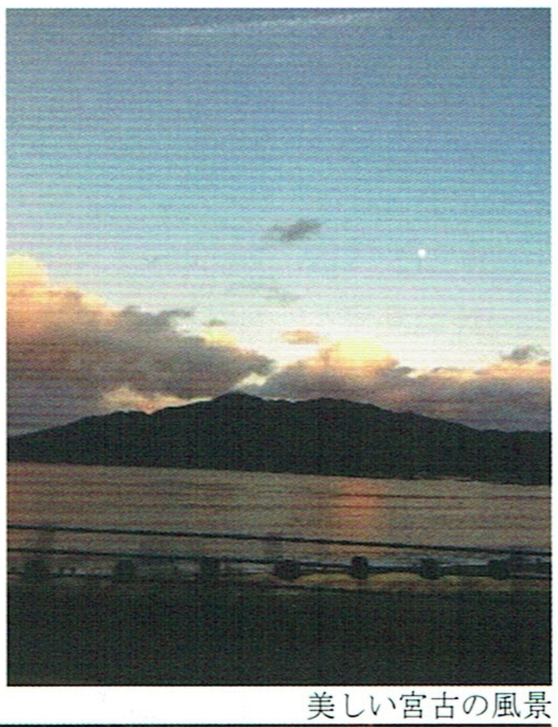
12月10日　片道5時間超！陸の孤島・山田町

岩手の三陸の真ん中に位置する山田町へは、内陸部からの交通の便がなく、沿岸の宮古市や釜石市を経由しなければなりません。12月10日東京定期演奏会の終演後、オーボエ松岡、ヴァイオリン平井・加藤、ヴィオラ中川、チェロ横山の5名が現地へ向かい、この日は宮古まで。夜遅い到着となりました。

翌日、いっぽいっぽ岩手での演奏の様子

12月11日

翌11日は、宮古市を早くに出発し、護岸工事が進む沿岸部を南下すること45分。牡蠣やホタテの養殖筏が浮かぶのどかな湾とは対照的に、陸側は一面工事現場となっている山田町へと入りました。土埃の舞う仮の道路を進みます。まず訪れたのは市役所の隣にあるコミュニティーセンター。盛岡の福祉専門学校生が、山田の子どもたちのために企画したクリスマス会にお邪魔しました。


美しい宮古の風景

2階でリハーサルが進む中、階下の会場ではドレスアップした子供たちと仮装した大学生が一緒にゲームをして遊んでいます。ひとしきり遊んで、振り返ると、そこには楽器を持った演奏家たちが！初めて聴く生の演奏に、子供たちはじっくり耳を傾けます。飾り付けで盛り上げてくれた学生たちもクリスマスメドレーでノリノリ。震災当時はまだ中学生くらいでショックも大きかったであろう学生たちが、山田の子どもたちを楽しませようと奮闘する姿に感動しました。

特等席で聴き入る子どもたち

大学生のリードでゲーム大会！

午後は、車で5分の距離にある「いっぽいっぽ岩手」へ。この施設は震災後、何もかもを失った人々へ寄り添うため、キリスト教団体が主体となり交流の場として開設されました。お茶を飲み、話をし、信頼の絆を取り戻していった大切な拠点となっています。この日は12月11日。月命日でした。岩手の民謡が郷愁を誘います。「こんな音楽が聴けてうれしい、陸の孤島へ来てくれてありがとう」と笑顔で話してくださったご高齢の女性。蒐集していた800枚の CD が流されてしまったという方もいらっしゃいました。

いっぽいっぽ岩手

一息ついて、夜は宮古市内でクリニックを開催。弦楽器愛好家の４団体と、宮古高校の木管五重奏の生徒さんたちを90分みっちり指導しました。2公演の演奏を終えたばかりにもかかわらず、厳しい指導に熱が入ります。会場となった宮古市民文化会館も被害がありましたが、きれいに復興再開されています。宮古という土地にたくさんの音楽愛好家が育ち、生きる糧になればと願います。

12月12日　災害復興住宅ができ始めた田老（たろう）町

田老の風景

この日は、宮古市内でも最も甚大な被害を受けた田老地区の巨大仮設住宅地のサポートセンターにて演奏します。現在の居住者は100名ほどに減ったそうですが、震災からの5年間の仮住居であったこの土地にも愛着が生まれ、多くのお客様が仮設住宅以外からも駆けつけてくれました。

開演前、来場の皆さんと一緒に折り紙に興じるスタッフ。思いがけない記憶力を発揮したのは事務所スタッフ・益満。思いがけず生まれた交流にお互い心ほぐされるひと時でした。コンサートでは日本の歌を口ずさみ楽しい穏やかな時間が流れ、終演後は東京土産でお茶っこ会。楽員も混ざっての楽しい時間が続きました。

終演後のお茶っこ会の様子。中央奥がチェロの横山

オーボエ松岡も地元の方々と何やら話し込んでいます

ＧＰＳで計測すると、地震でこんなにも
地面がずれてしまったそうです

12月13日

午前中は、昨年2015年にも訪れた恵風支援学校へ。本当に素直な子供たちです。目をキラキラと輝かせ、食い入るようにメロディーの移り変わりを追いかける姿に、こちらも胸がいっぱいになります。喜びも悲しみも、感じるままに表現してくれる彼らの心に、音楽はどんな風に響いているのでしょうか。音楽の“すごさ”を感じさせてくれました。

生徒さんからの質問にも応じました

今回の最後の公演は、宮古市内の中心部にあるデイサービスへ伺いました。会場の準備が整いお客様をお迎えする時間になると、「えらいとこにきちゃったな！こんなのはじめてだ」という声が聞こえてきました。そう、80年を生きてきて、初めての生演奏です。演奏後には「涙があふれてきたよ、この世のものとは思えない、ありがとうありがとう」と片付けを進めるスタッフにまで感動を伝えてくださいました。

今回の一連のコンサートは弦楽四重奏にオーボエという珍しい編成で訪問しました。オーボエが加わることで弦楽器と管楽器のアンサンブルとなり、オーケストラに近い響きをお届けできたと思います。マルチェロ作曲のオーボエ協奏曲は心に深く沁み入り、岩手民謡「南部牛追い唄」は郷愁を誘いました。どうかこの体験が皆さんの心の宝物になるように、と願ってやみません。

日本フィルハーモニー交響楽団　企画制作部長　益満行裕

2016年12月11日の夕方から私は岩手県宮古市へ入った。東京から東北新幹線はやぶさで2時間15分かけて盛岡駅に赴き、そこからまた2時間15分バスの旅。決して交通アクセスが良いとは言えないこの土地は、2011年3月11日の東日本大震災において地震だけではなく津波による尋常ならざる被害を受けた。中でもリアス式海岸の奥まった所にある田老町には30メートルを超える大津波が襲い、一帯は灰燼に帰した。もっともこの町は長い歴史の中で幾度も津波の被害にあっており、10メートル級の堤防は存在するのだが、今回の「1000年に1度」の大災害には全く太刀打ちできなかったのである。

地元の方々と折り紙で交流

これまで日本フィルが200回以上展開してきた「被災地に音楽を」プロジェクトの一環で、今回も奏者と事務方が宮古を1年ぶりに訪れた（なお私自身は本プロジェクトに初参加である）。5年という月日は、目に見える震災被害が残るには長すぎ、精神的痛みが消えるには短すぎる期間だということを強く感じた。現在の日本の力をもってすれば、ライフラインや土地の（表面上の）復旧は着実に進んでいる。街にはコンビニもあれば呑み屋、カラオケ、ファッションセンター「しまむら」だってあるのだ。しかしながら現地市役所の担当者からは、人間対人間のコミュニティの欠如が大きな問題となっている旨、お話があった。もともと若い世代の減少傾向にあったところへ震災が加わり、ますます街から活力が失われていることも否めない。

3日間という短い時間ながらも、コミュニティセンターや特別養護学校や福祉施設、そして地元アマチュア合奏団を対象としたクリニックというように、様々な年齢・地域の方々と接することが出来た。皆さん純粋に音楽を楽しみ日々の暮らしを営んでいる。街の中に地方独特の寂寥感は抗えないが、それは東北だけのことではない。しかし一つ私の奥深くに鈍痛を与えるのは、段々人の減りゆく仮設の施設で老人たちの折り紙を折り続ける姿である。

日本フィル「被災地に音楽を」は、三菱 UFJ ニコス株式会社の支援を得て行っています。